－所蔵作品紹介－

黒田　辰秋　KURODA Tatsuaki

神代欅彫文飾棚

じんだいけやきちょうもんかざりだな

作品データはこちら

黒田辰秋（明治37～昭和57）は、氷見晃堂（明治39～昭和50）とともに、木工芸の分野で初めて、重要文化財保持者に認定された。

京都の塗師屋の六男に生まれながら、漆芸の分業制にはあいいれず、独学で素地から仕上げまでの一貫制作をこころざした。大正末ごろから河合寛次郎、柳宗悦らと交流し、民芸運動に参加する。そのなかで朝鮮、特に李朝の木工に強い影響をうけ、後年の大らかな作風の根底をなすものとなった。また昭和８年には、短期間ながら琴似工業試験場（現在の北海道立工業試験場の前身）で、木工の指導にあたっている。戦後は、日本伝統工芸展に出品、若手の作家に多大な影響をあたえた。

「神代欅彫文飾棚」（第22回日本伝統工芸展出品）は、昭和30年代ごろからたびたび制作されている飾棚の一点。

天板の稜線をはじめ、直線的要素のほとんどにやわらかな丸みが与えられており、ゆったりとした力がすみずみにまでいきわたっている。扉にほどこされた彫花文は、黒田が好んで用いたものであり、そのうねりや反り返りには、エネルギッシュともよべる力強さがみられる。

何十回となく透明な漆を拭きこんでいく拭漆仕上げ、メキシコ貝の輝きを生かした耀貝螺鈿など、黒田の作品の色調は、いずれも強く、深みをたたえているのが特徴である。しかし、神代―何百年も土中に埋もれ、青みがかった独特の色調を示す材―を用いたこの作品では、あっさりとした蠟拭き仕上げがほどこされている。その抑制された仕上げによって、神代欅の味わいある色調があますところなくいかされているといえるだろう。

旭川美術館だより「氷華」No.19（1988.12発行）「収蔵作品から」より